

高等学校の実践報告Ⅱ

1 いじめ事案に対する組織の実態・課題による目標設定

いじめ事案に対する 組織の実態	目標 (目指す組織像)	いじめ事案に対する 日常的な課題
・いじめ事案に対応した経験があまりない。 ・いじめに特化した研修の機会がほとんどない。 ・「いじめ」と教員が認識せず、組織で対応できていない事案がありうる。	・教員が「いじめ」の捉え方について共通認識をもち、未然に防止する方法や、早期発見、情報共有、報告、判断、対応、役割分担をする方法について、共通理解する。	・過去数年間、深刻ないじめ事案が起きていないため、「この学校ではいじめは発生しない」と思い込みやすく、早期発見を難しくしている可能性がある。 ・職員がいじめ対応に慣れていないため、事案が発生した場合に、早期対応ができない恐れがある。

2 研修のねらい（実践前）

【ねらい（研修を通じて伝えたいこと・組織に期待すること）】※箇条書き	時間の目安
・いじめ事案に組織で対応する方法を身に付ける。 ・教員同士にも、「いじめ」に対する考え方に個人差があることに気付く。 ・教員同士が連携し、組織的に対応することの重要性を共通理解する。 ・組織力に欠かせない教員同士の人間関係を深める。	60 分

3 研修の実践

実施日	機会（職員会議・担任会など）	活用事例
10 月 2 日 金曜日	現職研修	事例 6 (高②)
実施時間	参加者	
16:00~17:00 (60 分)	教諭, 実習助手, 養護教諭 計 46 名 管理職 (参観) 3 名	

4. 工夫したこと（独自性）

- ・「いじめ」をテーマに「組織力」を高めることを強調した研修にした。
- ・研修時間が 60 分を超えない工夫をした。各ワークの時間を標準時間より 1～3 分ずつ削減した。
- ・パワーポイント資料を加工した。準備された資料では、研修の前半にまとめてワークの説明をし、後半にワークの実践を行うことになっている。説明とワークの時差を減らすため、今回は「目的➡ワークⅠ説明➡ワークⅠ実施➡ワークⅡ説明➡ワークⅡ実施」に変更した。
- ・グループの司会者を設定せず、ファシリテーターが研修全体とワークの進行を行った。
- ・グループメンバーの性別、年齢、所属学年がばらばらになるようにした。日頃、接点のない教員同士が同じグループになることで、より多くの気づきを得たり、組織力を高めたりすることを期待した。
- ・「現況のまとめ」は研修時に配付した。事前配付により、研修スタート時の事例の理解度に差が生じたり、参加者が研修に負担を感じたりすることを懸念したためである。

5. 実践して気が付いたこと（成功点と改善点）

- ・事前に、司会者の代わりに各グループ1名に「話し合いが活発でないときに促してほしい」と依頼し、約5分間、研修の流れを説明しておいた。実際には、特に介入することなくワークは進んだようである。
- ・司会者を設定しなかったことで、ファシリテーターの意図や雰囲気がグループワークに反映されやすくなったと感じる。また、事前に司会者と打ち合わせをする手間を省くことができたり、ワーク中の司会者の発言時間がなくてすんだりするなど、準備や進行が効率化したと思われる。逆に、経験のある教員に司会者を任せた場合、話し合いをより上手く誘導してもらうことができ、違った成果が得られたかもしれない。
- ・事前に準備されたパワーポイント資料はしっかりした構成に仕上がっており、加工の仕方次第で、時間を短縮したり、強調したい部分を変更したりすることができると思われる。

6. 参加者の声（『個人の振り返りシート』より）

- ・被害生徒や加害生徒だけではなく、周囲の生徒からも情報を集め、客観的に判断する必要があると感じた。
- ・先入観なく、聴き取りをしっかりと行い、客観的に状況を把握するのは大変であることが分かった。
- ・被害者、加害者の背景を知る必要がある。多面的に生徒をサポートする重要性を感じた。
- ・自分が見落としていたことに他の先生が気付いていて、視野が広がり、話し合いの重要性を感じた。
- ・同じ事実に対しても、経験、立場、年齢、個性によって見方や考え方が異なり、集団の強みとなると思う。
- ・何気ない行為でも、注意して見てみると、危険な行為が多くあることが分かった。小さなSOSを見逃さないようにし、速やかな対応が重要であると感じる。
- ・被害生徒を守るべきであり、本人の被害感があるかないかで、対応が変わることがないようにしたい。
- ・「いじめ」について、簡単に判断が下せるものではないと分かった。
- ・フローチャートを作成することで、多くのケースに対応しやすくなるのがよいと思った。
- ・早い段階で報告、連絡、相談ができるよう事前にシステムを確立しておくべきである。
- ・多くの教員は実際のいじめ事例に慣れていないため、自信をもって行動することが難しいと思われるが、ワークを通して誰に対して、どのように頼ればよいのか分かった。
- ・担任としての立場に固執せず、一人で抱え込まず、周囲と協力すべきだと感じた。多くの教員が連携することで、よりよい多くの対応策を思いつき、対応することができると期待できる。
- ・いつでも相談し合える環境をつくっておくことや、教員間で定期的に情報を共有する必要性を感じた。できるだけ多くの方々と情報共有することが、やがて校外の機関との連携にもつながると思う。
- ・教員一人一人が意見を表現し、否定せず、認めていくことが生徒のためにもなっていくと感じた。
- ・今後もいろいろな事例を考えて、複数で対応策を話し合っていくとよい。実際にいじめ事案が発生したときには、対応を記録し、検証していくことが大切である。
- ・生徒指導部に任せるのではなく、それぞれの教員が組織の一員として考える必要があり、継続的な被害生徒への配慮、加害生徒や周囲の生徒への指導を忘れないようにしたい。
- ・学校はいじめへの対応として、緊急と中・長期に分けて、個人と集団のそれぞれに対して、計画を立てて取り組む必要があると感じた。また、再発防止への取組を常に考えておくことが大切だと思った。

7. 考察（感想、成果、今後の課題や組織への期待）

参加型の校内研修は、一方的に聴くだけの研修とは異なる意義があったと感じる。「いじめ対応」の研修としてだけでなく、「教員の組織力」を育成するための研修と捉えると、いじめが多発していない学校でも実施しやすく、また実施する効果はあると思われる。研修を通じて学校の組織力は向上したと期待できるが、継続的で、定期的な研修が望まれる。